【一色天神遺跡の出土銭から】

一色天神遺跡の中世の層の年代は、出土した土器・陶磁器から 14 世紀後半（鎌倉時代末期・南北朝時代・室町時代初期）を中心とした時期と考えられます。中国産磁器（竜泉窯系青磁）から見ると 13 世紀のものがあり、渡来銭では 11 世紀～ 12 世紀の北宋銭が主流です。どうしてこのように年代のずれがあるのでしょうか。

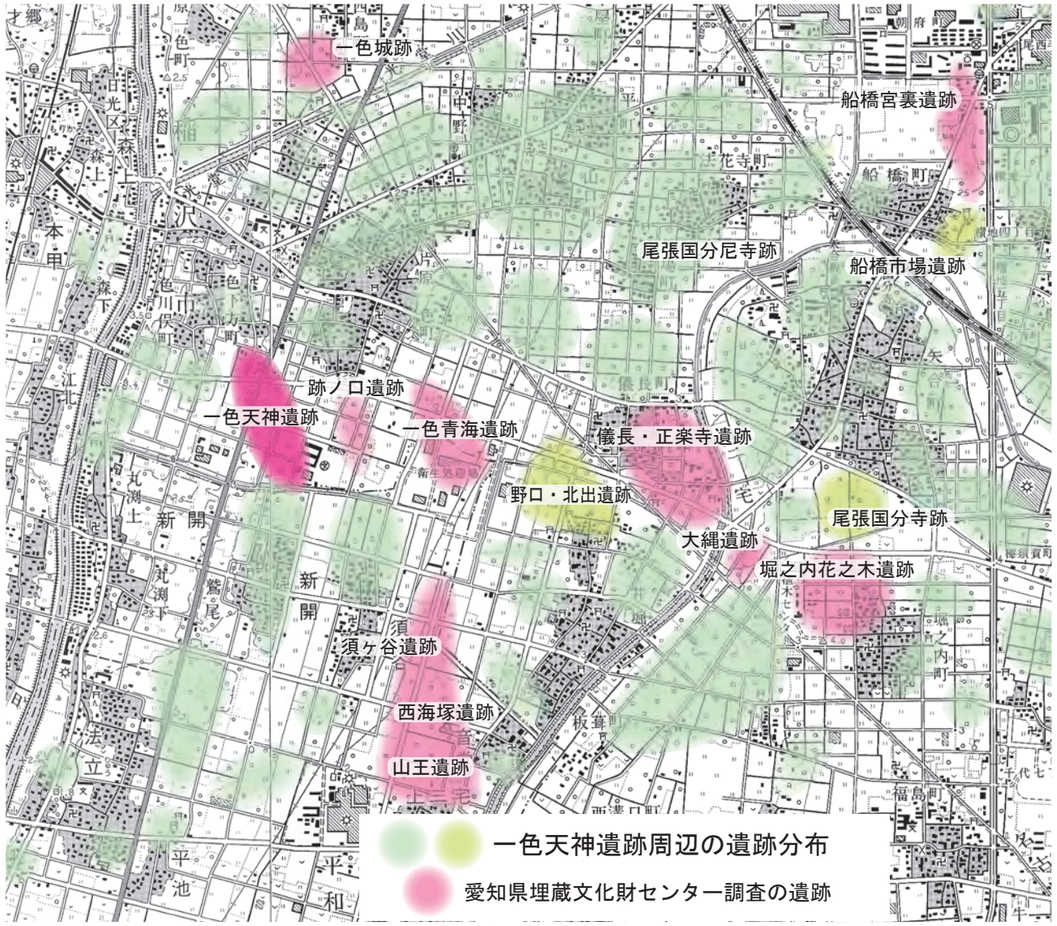
中国王朝は北宋（960 年～ 1126 年）・南宋（1127 年～ 1279 年）・元朝（1271 年～ 1368 年）・明朝（1368 年～ 1644 年）と続きますが、各王朝で銅銭の発行量と渡来銭の量は北宋・明朝が多いようです。理由として、南宋と元朝で会子や交鈔という紙幣が本格的に流通していたこと、日本では平氏政権（1160 年代～ 1185 年）の日宋貿易と室町幕府の日明貿易（1401 年～ 1549 年）で積極的に銅銭を輸入したことがあります。一色天神遺跡で明銭が出土しないのは 15 世紀初め頃には埋まってしまったことの根拠の一つとなります。また、この地域では 13 世紀半ばの納税が現物納から銭納になった時期でもあるので、銅銭の流通に拍車がかかっていたと考えられます。

旧佐織町諸桑の埋納銭 （宋銭の比率が大きい）の時期も鎌倉時代末～南北朝時代と推定されており、ほぼ同時期と考えられます。

一色天神遺跡の銭文のわかる出土銭（全て北宋銭）の種類（初鋳年）を年代順に列挙すると、熙寧元宝（1068 年）・元豊通宝（1078 年）・元祐通宝（1086 年）・元符通宝（1098 年）・聖宋元宝（1101 年）となります。

土坑 137SK 出土 ↑

← 土坑 109SK 出土



（縮尺 1/25,000）

稲沢市 一色天神遺跡 地元説明会資料

令和６年 10 月 26 日（土） 午前 11 時～

稲沢市一色森山町に所在する一色天神遺跡では、今回が初めての本格的な発掘調査となります。

県立いなざわ特別支援学校の校舎建築計画に伴う愛知県埋蔵文化財調査センターの試掘調査により、ここにも中世の遺跡の広がりが確認されました。発掘調査は（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、（株）島田組の調査支援を受けて実施しています。調査期間は令和６年９月から 12 月です。

今回の地元説明会では調査区西半の中世の遺構が発見された部分を中心にご紹介します。今後は弥生時代～古墳時代の調査を進めていきます。

24Aa 区西部の遺構群（北東から撮影）

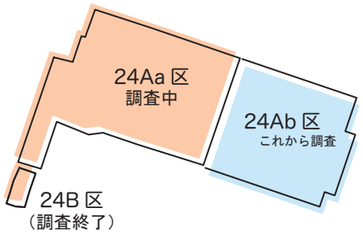
公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24
http://www.maibun.com

調査監理 愛知県埋蔵文化財調査センター

調査支援 shimada 株式会社島田組
〒 581-0034 大阪府八尾市弓削南 3-20-2
https://shimadagumi.co.jp

一色天神遺跡は尾張平野の中央部、三宅川と日光川に挟まれた沖積低地に位置しています。遺跡周辺は網状に広がる旧流路によって形成された島状の微高地と後背湿地が錯綜した中にあります。視野を広げてみると、稲沢市北西部から清須市にかけて広がる海浜性浜堤（第二浜堤）の微高地の一画にあたり、周辺ではとくに弥生時代をはじめ多くの遺跡の存在が知られています。

一色天神遺跡のすぐ東側には跡ノ口遺跡（弥生時代中～後期）、鷲尾遺跡（古墳時代～近世）、さらに東方 500 mのところに弥生時代中期の拠点的集落として知られる一色青海遺跡が展開します。一方、近辺での中世期の遺跡の様相は発掘調査例が少なく、北方約 1.7 km離れた一色城（片原一色城）跡の発掘調査例が貴重な報告として参考になります。



一色天神遺跡　調査区区分図

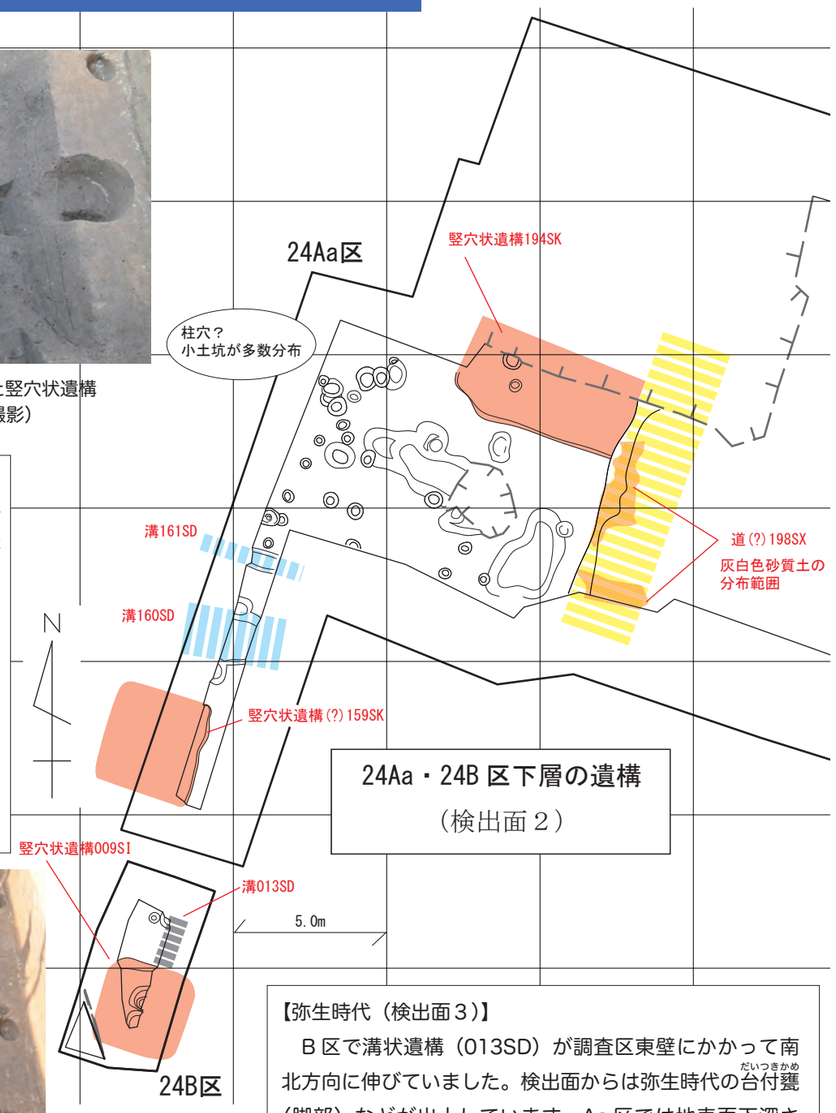
竪穴状遺構 134SI と鍛冶炉 (?) 跡（北東から撮影）

鍛冶炉 (?) 焼土塊と焼石（南西から撮影）

北宋銭（元豊通寶）出土状況

24B 区中層で確認された竪穴状遺構
009SI（南から撮影）

竪穴状遺構 107SK 山茶碗類出土状況
（東から撮影）



【中世（14 世紀後半、検出面２）】

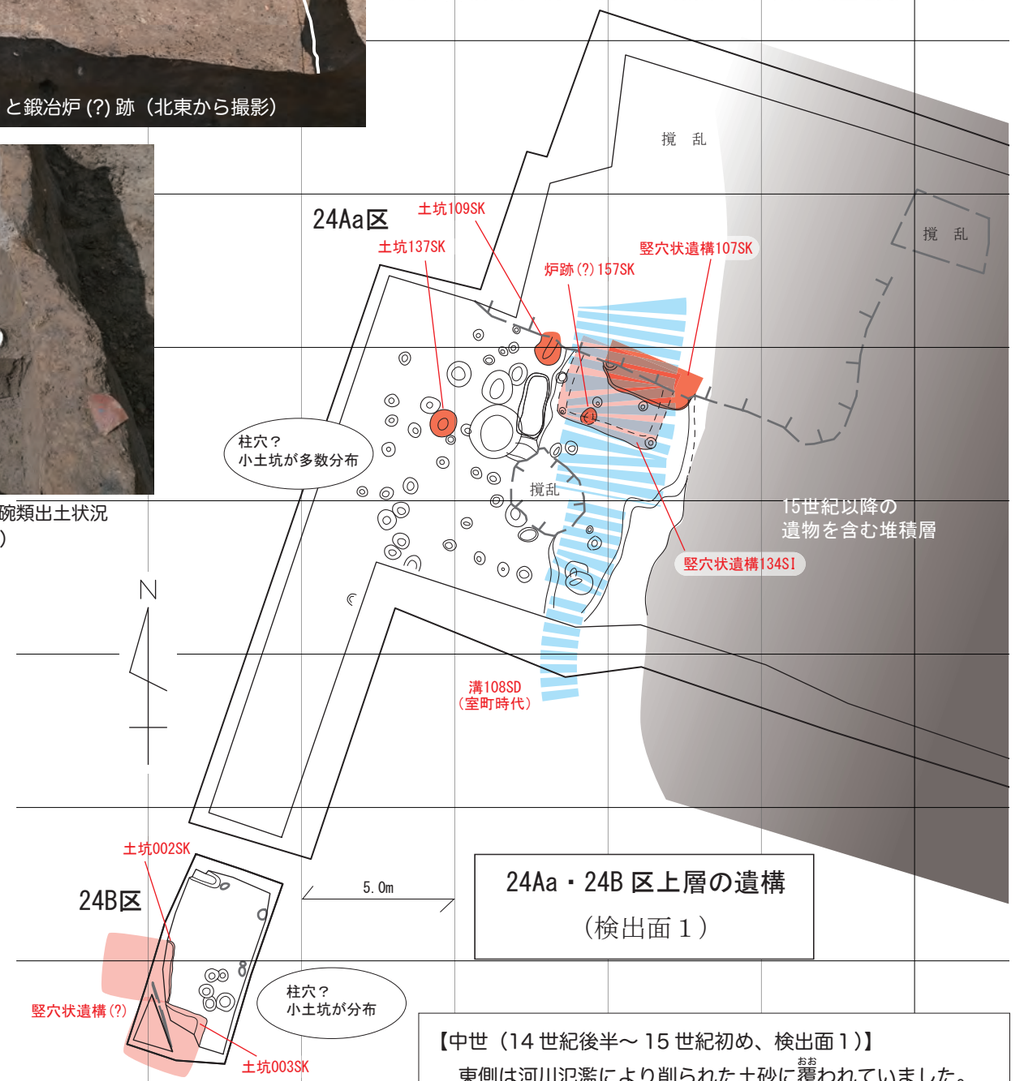
河川の氾濫による土砂で破壊されているようです。B 区の竪穴状遺構（009SI）では鉄滓の小片を伴っており、鍛冶工房と考えています。

Aa 区では 194SK のようにのちに記す竪穴状遺構（134SI）の下層に展開する竪穴状遺構が広がっており、炭化物層の広がりが見られますが、明確な鍛冶工房を示す遺物等は見られません。

24B 区下層で確認された溝 013SD（南から撮影）

【弥生時代（検出面３）】

B 区で溝状遺構（013SD）が調査区東壁にかかって南北方向に伸びていました。検出面からは弥生時代の台付甕（脚部）などが出土しています。Aa 区では地表面下深さ約２mのトレンチの断面で弥生土器が顔を出しています。今後の調査が待たれます。



24B 区上層で確認された遺構（西から撮影）

【中世（14 世紀後半～ 15 世紀初め、検出面１）】

東側は河川氾濫により削られた土砂に覆われていました。Aa 区の竪穴建物（134SI）は焼石と焼土をともなう炉跡（157SK）と砥石・鉄製品・鉄滓の小片を伴うため、鍛冶工房と考えています。鍛冶作業で排出される鍛造剥片がないか床面の炭化物層をサンプル土として取り上げ、分析予定です。

Aa 区では墓の可能性も考えられる中世の遺構がいくつか検出されています。109SK と 137SK からは数枚の銅銭（北宋銭）と山茶碗が出土しています。